

大学生の自己愛的甘えと誇大型・過敏型自己愛傾向との関連

神谷真由美・上地雄一郎・岡本祐子

The relationship between narcissistic amae, oblivious narcissism,
and hypervigilant narcissism in college students

Mayumi Koya, Yuichiro Kamiji, and Yuko Okamoto

本研究は、自己愛的甘えと2つの自己愛傾向(誇大型・過敏型)との関連を検討することを目的とした。大学生を対象に、自己愛的甘えと誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向を測定する尺度を用い、質問紙調査を行った。大学生255名の回答を分析の対象とした。まず、自己愛的甘えと誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向との相関係数を算出した。その結果、中程度の正の相関が認められたのは、過敏型自己愛傾向のみであった($r=.42\sim.55$)。次に、対象者を2つの自己愛傾向の得点により、それぞれ高群と低群に分類し、「自己愛的甘え」の3下位尺度得点において、誇大型自己愛傾向(高・低)×過敏型自己愛傾向(高・低)の2要因分散分析を行った。その結果、誇大型自己愛傾向の主効果は「許容への過度の期待」のみに、過敏型自己愛傾向の主効果は3下位尺度全てにおいて認められ、いずれも高群が低群よりも有意に高かった。以上から、自己愛的甘えと2つの自己愛傾向の関連が認められ、特に、過敏型自己愛傾向と密接に関連することが示された。

キーワード：青年期、甘え、誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向

問 題

日本では「甘え」という言葉は、日常用語として用いられている。しかし土居(1971)が、「甘え」を“日本人のパーソナリティ構造を理解するための鍵概念”と報告して以降、「甘え」は精神病理学をはじめ、さまざまな分野で用いられるようになった。土居(2001)は、「甘え」とは“対人関係において、相手の好意をあてにして振舞うこと”と定義した。一般に「甘え」は、他者に愛され、他者と一体になろうとする欲求や感情のことであり、子どもが親、特に母親に接する態度や行動を指す場合が多い。土居(1971, 2000a)によると、他者に甘えたい欲求や、甘える行動は東洋・西洋を問わず見られるが、日本語の「甘える」という言葉がもつ意味を、一言であらわす西欧言語はない。これは、日本社会では親への依存性が育まれ、甘えるという行動パターンが社会構造にまで制度化されており、甘えたいという欲求を表現することが、社会的に許容されているためであると言う。

土居(1971, 2001)の言う「甘え」には、「健康で素直な甘え」と「屈折した甘え」がある。「健康

で素直な甘え」とは“相手との相互的な信頼を軸にした甘え”であり、このような良好な関係に根ざした甘えは自然発生的であり、無自覚である。一方、人間は甘えたくても甘えられない状況に陥ると、すねる、うらむ、ひがむ、ひねくれるなどの感情を抱く。これが「屈折した甘え」である。「健康で素直な甘え」は、満足の主体が自分だけではなく相手にもあるので、相手を信頼し、相手を思いやることができるものとなる。しかし「屈折した甘え」は、満足の主体が自分の側にあり、相手よりも自分が満足できるかどうかに関心が向けられている(玉瀬・相原, 2005)。

土居(2000b, 2001)は、「屈折した甘え」と自己愛を関連させて考えており、「自己愛的甘え」が存在するとした。自己愛的甘えは、甘えの対象との信頼関係・相互関係に問題があった場合、甘えが屈折し、甘えたいのに甘えられず、一方的で要求がましい形を取るようになった甘えである。自己愛的な人は、たとえ周囲にひどく依存している状況であっても、それを認めないために甘えの欲求はいつまでも満たされない。その結果、甘えは自己愛的な要求の形をとる。この甘えは、相手があつて甘えている素直な甘えではなく、誰と関わるかという相互関係とは無関係にただ甘えることだけを求める、一方的で要求がましい甘えである。稲垣(2007)は、この自己愛的甘えを、“「甘え」が満たされず、甘えたくとも甘えられないがゆえに、一方的で要求がましい自己愛的要求を伴う「甘え」と定義し、「配慮の要求」、「許容への過度の期待」、「屈折的甘え」の3下位尺度からなる自己愛的甘え尺度を作成した。稲垣(2007)によると、「配慮の要求」は“他者に対して自分に特別な配慮を向けてくれることを要求し、周囲がその要求に応じないと不満を感じる傾向”、「許容への過度の期待」は“周囲の人々から許容されるであろうという過度の期待を持つ傾向”、「屈折的甘え」は“甘えたいのに甘えられないがゆえに、他者に素直な甘えをむけることができず、一方的でゆがんだ形態をとる甘え”を示す。

また土居(2000a)は、自己愛的甘えと関連する精神分析学の概念に、Balint(1952 森他訳 1999)の「受身的対象愛(passive object love)」、Kohut(1971 水野他訳 1994)の「自己対象(self-object)」があるとした。Balint(1952 森他訳 1999)の提唱した受身的対象愛とは、対象に愛されたいと思う心を意味する。人は受身的対象愛が満たされない場合、病的な自己愛が生じ、対象関係においてわがままで要求がましい状態を伴うとした。これが自己愛的甘えである。また、Kohut(1971 水野他訳 1994)の提唱した自己対象とは、特定の人物や対象、象徴によって喚起される、自己を支えるために必要な体験である。Kohut(1971 水野他訳 1994, 1984 本城他訳 1995)は、鏡映・理想化・双子の3つの自己対象体験があるとした。鏡映自己対象体験は自分自身が表出した行動や感情を映し返してもらうことで自己が承認される体験、理想化自己対象体験は理想化した対象と融合することで安心感がもたらされる体験、双子自己対象体験は自己と対象の間に類似性や共通性を感じる体験である。さらにKohut(1971 水野他訳 1994, 1984 本城他訳 1995)は自己の発達について、以下のように述べている。乳児は断片的な自己の状態であるが、養育者との融合の特質が強い原始的な自己対象体験を経て、自己の凝集性が高まっていく。その後、十分な自己対象体験がありながら適量の欲求不満が与えられることにより、自己対象体験が担っていた自己を安定化させる機能を内在化していく(変容性内在化)。それにより、原始的な自己対象体験がなくても、自律的に自己を安定化させることが可能となる。原始的な自己対象体験が不十分であり、変容性内在化がうまくいかないと、自

己愛的な傷つきやすさが顕著になる。この状態が、自己愛的甘えであると考えられる。

さて近年、自己愛傾向を対人的スタイルの特徴により2類型に分けて捉える視点が一般化している。この2類型とは、Kernberg (1975) の考える自己顕示的で他者の反応に鈍感な誇大型自己愛傾向と、Kohut (1971 水野他訳 1994) の考える他者の反応に敏感で注目されるのを避ける過敏型自己愛傾向である。この2類型は、当初は自己愛性人格障害者を記述する際に用いられていたが、現在では、非臨床群の自己愛傾向の研究にも当てはめられている (例えば、相澤, 2002; Hibbard, 1992; 中山, 2007; Wink, 1991)。一般青年を対象に、2類型をもとにした自己愛傾向のサブタイプも見出されている (小塩, 2004; 清水・川邊・海塚, 2007)。また、自己愛傾向を測定するための尺度の開発も多く行われているが、その中で最も広く用いられている尺度に、Raskin & Hall (1979) の Narcissistic Personality Inventory (以下, NPI) がある。NPI は、DSM-III (American Psychiatric Association, 1980) の自己愛性人格障害の診断基準に基づいて作成された尺度であり、誇大型自己愛傾向が強調されている (上地・宮下, 2005)。このNPIをもとに、小塩 (1998) が、3下位尺度で構成される自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) を作成している。3下位尺度の内容は、他者から注目されたり賞賛されたりすることを期待する「注目・賞賛欲求」、強い自己肯定感を意味する「優越感・有能感」、自ら決断・主張し、やや自己中心的な「自己主張性」である。NPI-Sによって測定される自己愛傾向は、誇大型自己愛傾向を測定していると考えられるが、「注目・賞賛欲求」は過敏型自己愛傾向とも関連する部分がみられると指摘されている (上地・宮下, 2009)。一方で、過敏型自己愛傾向について言及した Kohut (1971 水野他訳 1994) の理論に基づいて開発された尺度に、上地・宮下 (2002) の自己愛的脆弱性尺度 (Narcissistic Vulnerability Scale; NVS)、NVS 短縮版 (上地・宮下, 2009) がある。上地・宮下 (2005, 2009) は、自己愛的脆弱性を“自己愛的欲求の表出に伴う不安や他者の反応による傷つきなどを処理し、心理的安定を保つ力が脆弱であること”と定義した。NVS 短縮版は4下位尺度からなり、その内容は「承認・賞賛への過敏性」、自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向である「自己顕示抑制」、自分への特別の配慮を求める傾向である「潜在的特権意識」、不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さである「自己緩和不全」である。

稲垣 (2007) は、自己愛的甘え尺度の妥当性の検討にあたり、誇大型自己愛傾向が強調された NPI-S (小塩, 1998) との相関係数を算出した。その結果、NPI-S のうち、過敏型自己愛傾向との関連がみられる「注目・賞賛欲求」は、自己愛的甘え尺度の3下位尺度全てと弱い正の相関を示した ($r=.21 \sim .32, p<.01$)。誇大型自己愛傾向を測定する「優越感・有能感」とは、「許容への過度の期待」と弱い正の相関 ($r=.23, p<.01$)、「自己主張性」とは有意な相関が認められなかった。以上の結果から稲垣 (2007) は、自己愛的甘え尺度を、NPI-S で測定される自己愛傾向とは弱い関連性を持ちながらも、別の構成概念を捉えている尺度であると結論づけた。また、自己愛的甘えの下位尺度のうち「許容への過度の期待」は誇大な側面を、「配慮の要求」と「屈折的甘え」は過敏な側面をもつことを示唆した。

しかし、自己愛的甘えが誇大型自己愛傾向を含みつつ、過敏型自己愛傾向に近い特徴を示すことを明らかにするためには、誇大型自己愛傾向が強調されている NPI-S との関連を検討するのみではなく、過敏型自己愛傾向との関連を検討する必要がある。その際、「甘え」と Kohut の理論との関連

が指摘されていることから (土居, 2000a), 過敏型自己愛傾向の測定にあたっては, Kohut の理論に基づいた尺度である自己愛的脆弱性尺度 (NVS) を用いることが有意義であろう。

本研究の目的

本研究は, 自己愛的甘えと誇大型自己愛傾向, 過敏型自己愛傾向との関連を検討することを目的とした。本研究の仮説は, 以下の2つである。

①稲垣 (2007) と同様, 自己愛的甘えの3下位尺度のうち「配慮の要求」と「屈折的甘え」においては, NPI-S のうち, 誇大型自己愛傾向を測定する「自己主張性」と「優越感・有能感」とは相関がみられないが, 過敏型自己愛傾向との関連がみられる「注目・賞賛欲求」とは正の相関がみられるであろう。また「許容への過度の期待」は「注目・賞賛欲求」とともに, 「優越感・有能感」とも関連がみられるであろう。

②自己愛的甘えは, 誇大型自己愛傾向よりも, 過敏型自己愛傾向と密接な関連がみられるであろう。

方法

1. 調査対象

A 県の大学生 261 名に対して質問紙調査を行った。このうち, 回答に欠損のあった 6 名を除いた 255 名 (男性 139 名, 女性 116 名) の回答を分析対象とした。

2. 調査手続きと調査時期

大学の講義時間終了後を利用し, 無記名式の質問紙を配布し, 実施した。調査時期は, 2011 年 11 ~12 月であった。

3. 調査内容

自己愛的甘え尺度 稲垣 (2007) が作成した尺度であり, 「配慮の要求」, 「許容への過度の期待」, 「屈折的甘え」の3下位尺度, 32 項目で構成される。本研究では対象者の負担を考え, 各下位尺度から5項目を選定し, 15 項目を実施した。項目の選定にあたっては, その下位尺度の概念を代表する項目であるかどうかという基準と, 稲垣 (2007) の因子分析 (主因子法・Promax 回転) での因子負荷量を参考に行った。本研究で用いた 15 項目を, Table 1 に示した。「全くない (1 点) ~ 「いつももある (5 点)」の5段階評定で測定した。

自己愛人格目録短縮版 (NPI-S) 誇大型自己愛傾向を測定する尺度として, 小塩 (1998) の NPI-S を使用した。「注目・賞賛欲求 (項目例: 私は, どちらかといえば注目される人間になりたい)」, 「優越感・有能感 (項目例: 私は, 周りの人たちより, 優れた才能をもっていると思う)」, 「自己主張性 (項目例: 私は, 自己主張が強いほうだと思う)」の3下位尺度, 30 項目で構成される。「まったくあてはまらない (1 点) ~ 「非常にあてはまる (5 点)」の5段階評定で測定した。

自己愛的脆弱性尺度短縮版 (NVS 短縮版) 過敏型自己愛傾向を測定する尺度として, 上地・宮下 (2009) の NVS 短縮版を使用した。「承認・賞賛過敏性 (項目例: 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと, そのことが気になってしかたがない)」, 「自己顕示抑制 (項目例: 人と話した後『あんなに自分を出すのではなかった』と後悔することがある)」, 「潜在的特権意識 (項目例:

他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので、腹が立つことがある)」、「自己緩和不全 (項目例: 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる人が身近にいないと、私は生きていけないと思う)」の4下位尺度、20項目で構成される。「まったくない (1点)」～「よくある (5点)」の5段階評定で測定した。

Table 1
本研究で用いた自己愛的甘え尺度の質問項目

項目	稲垣 (2007) での 因子負荷量		
	F1	F2	F3
因子1 配慮の要求			
・ 周りの人に対して、何も言わなくても、自分のしてほしいと願っていることを汲みとってほしいと思うことがある。	.82	-.03	-.11
・ 周りの人に対して、自分から言わなくても、もっと気持ちを察して欲しいと思うことがある。	.77	-.07	-.03
・ 自分が気がねしているということに、気づいて欲しいと思うことがある。	.75	-.02	.02
・ 周りの人に対して、もっと私に気がつかしてほしいと思うことがある。	.71	.02	.06
・ 周りの人の気くばりが足りないので、不満に感じることもある。	.69	.06	.05
因子2 許容への過度の期待			
・ 不適切なことをしたとしても、大目に見てもらえると思う。	-.07	.80	-.05
・ 自分の不注意でどんなに迷惑をかけても、周りに人は結局許してくれると思うことがある。	.04	.72	-.06
・ 相手に対して失礼なことをしても、そのうちに許してくれると思う。	-.02	.72	-.07
・ 責任を果たさなくても、周りの人はきっと許してくれると思うことがある。	.04	.68	-.02
・ わがままなことを言っても、そんなに嫌われることはないと思うことがある。	-.05	.66	-.01
因子3 屈折的甘え			
・ 私は、自分が思ったとおりにならないとすねる。	-.04	.10	.86
・ 私は、ちょっとしたことでふてくされる。	-.09	.10	.84
・ 私は、ちょっとしたことでむがむ。	.05	.01	.66
・ 私は、物事がうまくいかないとやけくそになる。	-.03	.13	.54
・ 私は、ささいなことで人をうらむ。	.14	.12	.47

結果

1. 測定尺度の検討

自己愛的甘え尺度の3下位尺度の α 係数を算出した。その結果、「配慮の要求」 $\alpha=.84$ 、「許容への過度の期待」 $\alpha=.84$ 、「屈折的甘え」 $\alpha=.83$ であり、十分な内的整合性が認められた。

次に、NPI-SとNVS短縮版が、それぞれ自己愛傾向の異なる側面を測定しているかを確認するため、相関係数を算出した (Table 2)。その結果、NPI-S合計とNVS短縮版合計には、有意な相関は認められなかった。またNPI-S合計は、NPI-Sの3下位尺度と高い正の相関 ($r=.74\sim.77, p<.01$)、NVS短縮版合計は、NVS短縮版の4下位尺度と高い正の相関 ($r=.66\sim.81, p<.01$) が認められた。以上から、NPI-SとNVS短縮版は、自己愛傾向の異なる側面を測定していることが示された。NPI-Sは誇大型自己愛傾向を、NVS短縮版は過敏型自己愛傾向を測定すると考えられる。

また、NPI-Sの3下位尺度のうち「注目・賞賛欲求」は、NVS短縮版合計とも中程度の正の相関が認められた ($r=.35, p<.01$)。これより「注目・賞賛欲求」は、誇大型自己愛傾向だけでなく、過敏型自己愛傾向と関連する部分があることが示された。

Table 2
NPI-S と NVS 短縮版の相関係数

	1	1-1	1-2	1-3	2	2-1	2-2	2-3	2-4
1. NPI-S 合計	—								
1-1. 注目・賞賛欲求	0.74 **	—							
1-2. 優越感・有能感	0.77 **	0.37 **	—						
1-3. 自己主張性	0.77 **	0.32 **	0.42 **	—					
2. NVS 短縮版合計	0.04	0.35 **	-0.12	-0.13 **	—				
2-1. 承認・賞賛過敏性	-0.01	0.34 **	-0.15 *	-0.21 **	0.81 **	—			
2-2. 自己顕示抑制	-0.09	0.09	-0.12	-0.16 **	0.74 **	0.55 **	—		
2-3. 潜在的特権意識	0.16 **	0.37 **	0.04	-0.04	0.66 **	0.46 **	0.29 **	—	
2-4. 自己緩和不全	0.08	0.26 **	-0.08	0.01	0.71 **	0.39 **	0.26 **	0.29 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$

2. 自己愛的甘えと誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向の関連

2-1. 自己愛的甘えと誇大型・過敏型自己愛傾向の関連

自己愛的甘えの3下位尺度と、NPI-S と NVS 短縮版の相関係数を算出した。結果を Table 3 に示した。

「配慮の要求」において、中程度の正の相関が認められたのは、NVS 短縮版の合計、「承認・賞賛過敏性」、「潜在的特権意識」であった ($r=.42\sim.55, p<.01$)。弱い正の相関が認められたのは、NPI-S の「注目・賞賛欲求」、NVS 短縮版の「自己顕示抑制」、「自己緩和不全」であった ($r=.24\sim.32, p<.01$)。

「許容への過度の期待」において、弱い正の相関が認められたのは、NPI-S の合計、「注目・賞賛欲求」、NVS 短縮版の合計、「潜在的特権意識」であった ($r=.21\sim.29, p<.01$)。

「屈折的甘え」において、中程度の相関が認められたのは、NVS 短縮版の合計、「承認・賞賛過敏性」、「自己顕示抑制」、「潜在的特権意識」であった ($r=.42\sim.54, p<.01$)。弱い正の相関が認められたのは、NVS 短縮版の「自己緩和不全」であった ($r=.34, p<.01$)。

Table 3
自己愛的甘えと NPI-S, NVS 短縮版の相関係数

	誇大型自己愛傾向				過敏型自己愛傾向				
	NPI-S 合計	注目・賞賛欲求	優越感・有能感	自己主張性	NVS 短縮版合計	承認・賞賛過敏性	自己顕示抑制	潜在的特権意識	自己緩和不全
配慮の要求	0.06	0.24 **	-0.01	-0.08	0.53 **	0.42 **	0.29 **	0.55 **	0.32 **
許容への過度の期待	0.24 **	0.25 **	0.19 **	0.12	0.21 **	0.06	0.13 **	0.29 **	0.17 **
屈折的甘え	-0.01	0.20 **	-0.15 *	-0.08	0.54 **	0.42 **	0.42 **	0.42 **	0.34 **

** $p < .01$, * $p < .05$

2-2. 誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向の高低による自己愛的甘え得点の比較

対象者 255 名を、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の高低により、高群と低群に分類した。誇大型自己愛傾向については、NPI-S 合計点のパーセンタイル順位に基づき、高群 130 名、低群 125 名となった。同様に、過敏型自己愛傾向は NVS 短縮版合計点のパーセンタイル順位に基づき、高群 126 名、低群 129 名となった。

誇大型自己愛傾向の高低と過敏型自己愛傾向の高低を独立変数とし、自己愛的甘え尺度の3下位尺度得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。結果を、Table 4に示した。

「配慮の要求」は、過敏型自己愛傾向の主効果が有意であり ($F(1, 251)=44.16, p<.01$)、高群 ($M=14.83$) が、低群 ($M=11.83$) よりも有意に高かった。「許容への過度の期待」は、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の主効果が有意であった (誇大型自己愛傾向; $F(1, 251)=9.54, p<.01$, 過敏型自己愛傾向; $F(1, 251)=3.91, p<.05$)。誇大型自己愛傾向においては、高群 ($M=10.99$) が、低群 ($M=9.55$) より有意に高かった。過敏型自己愛傾向においても、高群 ($M=10.77$) が、低群 ($M=9.81$) より有意に高かった。「屈折的甘え」では、過敏型自己愛傾向の主効果が有意であり ($F(1, 251)=57.20, p<.01$)、高群 ($M=13.51$) が低群 ($M=9.88$) よりも有意に高かった。

Table 4
自己愛的甘えの基本統計量および2要因分散分析結果 (誇大型自己愛傾向×過敏型自己愛傾向)

		過敏型自己愛傾向		$F(1, 251)$		交互作用
		低群	高群	誇大型自己愛傾向の主効果	過敏型自己愛傾向の主効果	
配慮の要求	誇大型自己愛傾向低群	11.83 (2.84)	14.28(3.80)	1.33	44.16**	1.35
	高群	11.83 (3.83)	15.32 (3.72)			
許容への過度の期待	誇大型自己愛傾向低群	9.29 (3.48)	9.83 (3.43)	9.54**	3.91*	0.64
	高群	10.34 (3.61)	11.62 (4.08)			
屈折的甘え	誇大型自己愛傾向低群	10.18 (2.72)	13.42 (4.61)	0.22	57.20**	0.69
	高群	9.56 (3.33)	13.59 (4.40)			

注) ()内は標準偏差
* $p<.05$, ** $p<.01$

考 察

本研究は、自己愛的甘えと誇大型自己愛傾向、過敏型自己愛傾向との関連を検討することを目的とした。仮説①は、“稲垣 (2007) と同様、自己愛的甘えの3下位尺度のうち「配慮の要求」と「屈折的甘え」においては、NPI-Sのうち、誇大型自己愛傾向を測定する「自己主張性」と「優越感・有能感」とは相関がみられないが、過敏型自己愛傾向との関連がみられる「注目・賞賛欲求」とは正の相関がみられるであろう。また「許容への過度の期待」は、「注目・賞賛欲求」とともに「優越感・有能感」とも関連がみられるであろう”と設定した。自己愛的甘えの3下位尺度とNPI-Sの相関係数を算出した結果、「配慮の要求」において、「優越感・有能感」、「自己主張性」とは有意な相関が認められなかったが、「注目・賞賛欲求」とは弱い正の相関が認められた。これは仮説を支持する結果である。「屈折的甘え」においては、NPI-Sの下位尺度とほとんど相関が認められなかった。誇大型自己愛傾向を測定する「自己主張性」と「優越感・有能感」と相関がみられなかったことは、仮説を支持する。しかし、過敏型自己愛傾向と関連がみられる「注目・賞賛欲求」と正の相関がみられなかったことは、仮説と異なる結果である。「許容への過度の期待」においては、「優越感・有能感」と「自己主張性」においてほとんど相関が認められなかったが、「注目・賞賛欲求」とは弱い正の相関が認められた。「自己主張性」と関連がみられなかったこと、「注目・賞賛欲求」と関連が

みられたことは仮説を支持する。しかし、「優越感・有能感」と関連がみられなかったことは、仮説と異なる結果である。以上から、仮説①は部分的に支持された。

仮説②は、“自己愛的甘えは、誇大型自己愛傾向よりも過敏型自己愛傾向と密接な関連がみられるであろう”と設定した。以下、自己愛的甘えの3下位尺度ごとに考察を行う。「配慮の要求」は、NPI-Sのうち過敏型自己愛傾向とも関連がみられる「注目・賞賛欲求」と弱い正の相関、NVS短縮版の合計、「承認・賞賛過敏性」、「潜在的特権意識」と中程度の正の相関、「自己顕示抑制」、「自己緩和不全」と弱い正の相関が認められた。また、誇大型自己愛傾向の高低と過敏型自己愛傾向の高低を独立変数とした2要因分散分析の結果、過敏型自己愛傾向の主効果のみが有意であり、高群が低群よりも有意に高かった。以上から、「配慮の要求」は、過敏型自己愛傾向と密接に関連していると考えられる。そもそも稲垣(2007)は、「配慮の要求」の項目を作成する際に、上地・宮下(2002)のNVSの項目を参考にしている。そのため、「配慮の要求」が過敏型自己愛傾向と関連するという結果は妥当であろう。また「配慮の要求」は、露骨な優越感や自己顕示とは異なる形での誇大性のあらわれである(稲垣,2007)。その誇大性は、質問項目の“何も言わなくても…汲みとって欲しい”“自分から言わなくても…察して欲しい”に代表されるように、自己をはっきり主張しなくとも、自分の存在意義への承認や特別な配慮を求めることであると考えられる。誇大型自己愛傾向は、自己主張の強さや、露骨な有能感や自己顕示が特徴であるため、「配慮の要求」とは関連がみられなかったと考えられる。

「許容への過度の期待」は、NPI-Sの合計、「注目・賞賛欲求」、NVS短縮版の合計、「潜在的特権意識」と弱い正の相関が認められた。また2要因分散分析の結果、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向の主効果が有意であり、いずれも高群が低群よりも有意に高かった。以上より、「許容への過度の期待」は、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向のどちらも関連していることが示された。稲垣(2007)は、「許容への過度の期待」が、NPI-Sの「優越感・有能感」と関連がみられたことから、「許容への過度の期待」は、他の2つの下位尺度と比較して、誇大的な側面を持つと示唆している。誇大型自己愛傾向が高い人も、過敏型自己愛傾向が高い人も、「許容への過度の期待」が高まるが、その背景は異なると推測される。誇大型自己愛傾向が高い人は、自分は周りの人達よりも優れているという有能感から、相手に対して不適切なことをしても大目に見てもらえるだろうという感情が働くと考えられる。一方で、過敏型自己愛傾向が高い人は、不安や抑うつを自分で緩和する力の弱さや、承認や賞賛への過敏さから、相手に対して失礼なことをしたとしても許してもらいたい、という感情が働き、相手からの許容を求めているのではないかと推測される。

「屈折的甘え」は、NPI-Sとはほとんど相関がなく、NVS短縮版の「自己緩和不全」と弱い正の相関、NVS短縮版の合計、「承認・賞玩過敏性」、「自己顕示抑制」、「潜在的特権意識」と中程度の正の相関が認められた。また2要因分散分析の結果、過敏型自己愛傾向の主効果が有意であり、高群が低群よりも有意に高かった。以上から、「屈折的甘え」は、過敏型自己愛傾向と密接に関連していると考えられる。「屈折的甘え」は、土居(1971,2001)の屈折した甘えに対応する内容であり、甘えたいのに甘えられない、他者に自分を認めてもらいたいという基本的欲動が転換し、不機嫌、軽い被害妄想、公然とした敵意、屈辱などの形態をとる(稲垣,2007)。NVS短縮版の「自己顕示抑

制」は、自己顕示を恥ずかしいものと感じて抑制する傾向である。自己顕示とは、他者に自分の存在を必要以上に示すことであり、他者から認められることをあてにしているという点で土居 (2001) の甘えの定義に当てはまり、甘えに含まれると考えられる。過敏型自己愛傾向が高い人は、「潜在的特権意識」が高く、他者からの特別の配慮を求めるにもかかわらず、「自己顕示抑制」、「承認・賞賛過敏性」の高さから、自己顕示を含む甘えを恥ずかしいと感じ、周囲の評価を気にして、表出できない。それが甘えたいのに甘えられない状況となり、屈折した甘えが高まると推察される。

以上から、自己愛的甘えの3下位尺度のうち「配慮の要求」と「屈折的甘え」においては、誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向のうち、過敏型自己愛傾向がより密接に関連していることが示された。これは、仮説②を支持する結果と言える。これより、甘えが満たされない場合に生じる自己愛的な要求は、2つの自己愛傾向のうち、主に過敏型自己愛傾向と関連することが示された。

付記

貴重なデータを提供していただいた藤井歩様に、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, **50**, 215-224.
- American Psychiatric Association (1980). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 3rd ed. Washington DC: Author.
- Balint, M. (1952). *Primary love and psycho-analytic technique*. London: The Hogarth Press.
- (バリント, M. 森 茂起・栢矢和子・中井久夫 (共訳) (1999). 一次愛と精神分析技法 みすず書房)
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (2000a). 土居健郎選集2 「甘え」理論の展開 岩波書店
- 土居健郎 (2000b). 土居健郎選集1 精神病理の力学 岩波書店
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- Hibbard, S. (1992). Narcissism, shame, masochism, and object relation: An exploratory correlational study. *Psychoanalytic Psychology*, **9**, 489-508.
- 稲垣実果 (2007). 自己愛的甘え尺度の作成に関する研究 パーソナリティ研究, **16**, 13-24.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2002). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成の試み 甲南女子大学研究紀要 (人間科学編), **38**, 1-10.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14**, 80-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, **17**, 280-291.
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kohut, H. (1971). *The analysis of the self*. New York: International Universities Press.

- (コフート, H. 水野信義・笠原 嘉 (監訳) (1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. (1984). *How does analysis cure?* Chicago: The University of Chicago Press.
- (コフート, H. 本城秀次・笠原 嘉 (監訳) (1995). 自己の治癒 みすず書房)
- 中山留美子 (2007). 児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程——自己愛における評価過敏性, 誇大性の関連の変化から—— パーソナリティ研究, **15**, 195-204.
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究——性役割感との関連—— 名古屋大学教育学部紀要 (心理学科), **45**, 45-53.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979). A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2007). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について 心理学研究, **78**, 9-16.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2005). 相互依存的甘えと思いやり, 屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要, **54**, 49-61.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.